うつしみ この内なる自然

上田三四二

うつしみ

この内なる自然

上田三四二

平凡社

上田三四二（うえだみよじ）

一九二三年兵庫県生まれ。京都大学医学部卒業。現在、歌人、文芸評論家。
主な著書に『斎藤茂吉』（筑摩書房）『西行・実朝・良寛』（角川書店）『俗と無常』（講談社）などがある。歌集には『湯井』（角川書店）などがある。

うつしみ　この内なる自然　　定価　一、三〇〇円
発行日　昭和五十三年十一月二十五日　初版第一刷発行

著　者　上田三四二
発行者　下中邦彦
発行所　株式会社平凡社
東京都千代田区四番町四の一
郵便番号　一〇二
電話　東京（〇三）二六五―〇四五一
振替　東京八―二九六三九
印刷所　図書印刷株式会社
製本所　和田製本工業株式会社

© 上田三四二 1978　Printed in Japan
落丁・乱丁本のお取替えは直接本社サービス課までお送り下さい（送料は小社で負担します）

目次

Ⅰ 再起 6
Ⅱ 自然 50
Ⅲ 他者 96

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.

Ⅳ 自己 …… 141
Ⅴ 無常 …… 181
あとがき …… 233

装幀＝三村　淳

うつしみ　この内なる自然

I　再起

高橋和巳の文学はかくべつ私に親しいものではなかったが、その死は確実に私に親しかった。

私も彼に先立つこと五年の昭和四十一年に、同じ結腸癌を病んでいるからだ。

それから満十一年が過ぎて、私はいまようやくこの病名を唇にする勇気をもつ。それまで、人に訊かれて答える必要のあるときは、結腸潰瘍とか、結腸狭窄とか、当り障りのない病名を挙げてきた。べつに嘘をついたわけではない。それらは事実私の表向きの病名であったが、その比較的穏当な病気の名を言うときにも、私の心臓は言葉の裏にある真実の針につつかれてびくりとした。

毎年予後調査の手紙が来た。それは、病気が病気だけに、そして病名は本人に伏せられているだけに、ただ近況を知らせてほしいという漠然とした問いに返信用の普通はがきが

一枚、白いまま添えてある。手にするたびに、鳩尾のあたりが冷たくなるのであった。この、質問の細目を欠いた一見非科学的な予後調査は、何気ない問いかけのうちに、私が生きているかどうかをきいているのだと思われた。四、五年がたって、手術の月の六月が近付いても調査が来ないと知ったときの、ほっとした思いを忘れない。再発のおそれは年とともに遠のいていったが、私はいまもその不安から自由にはなっていない。

びくびくしながら過ぎたそういう過去十一年間の半ばごろにあって、私は私よりも八歳年下の文学者の同じ病いによる死に出会ったのであった。迂闊な私は彼の病気のことをしらず、入院のこともしらず、新聞でいきなりその死を知らされて仰天した。誰がこのまだ若い作家の死を予想しただろう。そして病名は私の血を氷らせた。

それから満六年がたつ。希有にして——何ものかの恩寵によって、と私は神や仏の存在を信じていないにもかかわらず言いたい気がするほどだが、このなかなか予後の悪い部位の癌から癒されてまだ生きている私に、高橋和巳の七回忌をいう声がきこえてくる。ある新聞に寄せた高橋たか子の亡夫追悼の文章もその一つである。

その中で彼女は、高橋和巳という一人の人間の意志や希望、またその作品の中にもまだ

充分に表現されないままに終った沢山の知識の量といったものが、肉体の死とともに何処へ行ってしまったのか不思議だ、といったあと、こんな思い出を付け加えている。

「若かった頃に主人が誰か人の死に接して、『人間が死ぬんやからなあ！』と、感慨深げに言っていたことを、私はよく思い出す。現に生きている人間が死ぬ、ということの言語に絶する不可解さを、そのとき主人は言ったのであった。」（「高橋和巳の七回忌」）

いつでも死の方にのめり込み、生死を貫く悲痛な人間的運命といったものを見据えてきた高橋和巳にこの素朴ともいうべき咏嘆のあるのを私は面白いとおもい、ふと、夫人の筆になる「臨床日記」に思いが行った。私はこれを六年前の「文芸」の高橋和巳追悼特集号に読んで、意外な、とおもわれるようなこの作家の素顔に出会ったと感じたことがある。連想はそこへ落ちていったのである。

「臨床日記」のなかで、半ば死を予感しながら決定的な病名を知らされていない病人は、しずかな余生への夢を語っている。「しずかな余生への夢、旅、釣り、山、風景」（二月二十八日）。彼は釣の雑誌を古いものから全部揃えさせ、そういう写真や文章を、あるかどうかわからない彼自身の未来にかけて楽しんだ。なかでも彼を捉えたのは、日当りのいい

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.

家で草木を友として暮す隠遁の夢である。彼は退院後の願いをそこに籠めて、実際、妻に毎日のように家探しをさせている。以下、死の二カ月前にあたる三月の頃からその若干を引く。

十三日（土）

昨夕からの微熱がさがらないまま、深夜に三十八度の熱。両膝ひどく痛み、肩も痛む。鎮痛剤でおさまり、昼間もうつらうつら眠る。デンドラジウムの花、一輪買う。食欲なし。午後からすこしずつ楽になる。住居の雑誌また買ってきて見せる。「鎌倉にええ家さがしてな」「芝生で陽なたぼっこしたい」「土いじりするんやで。鉢買うてきて、花つくるんや」。

十九日（金）

十二時から三度目の検査におり、また私がついて行く。なおも新聞の広告欄で鎌倉での売家を見つけ、不動産屋に電話するようにと言う。主人の言うとおりにする。買う家の話ばかりするので、主人の想像にあわせて私もその家を思い描きながら話をする。ひ

ろびろした陽当りのいい庭で土いじりをするであろう主人を、不可能な時間の上に置いて見る。夕食に、さしみ、鳥とミツバの味噌汁。夜、肩痛む。

二十一日（日）

朝から点滴がおくれて辛がる。肩痛む。また鎌倉での売家の広告を見つける。私は不動産屋に電話する。「こんな病気をするということは考えかたや生きかたを変えろという警告や」「もうこれからは観念の凝縮に肝臓が耐えられんやろ」。四、五年間隠遁して、自然にしたしむ生活をし、そこから全く違った文学が出てくるであろうと、将来における自分の文学の質的な変化を考えている。先日私の買ってきたボケの花がきれいに咲き、それを眼でたのしむ。夕食に、支那料理屋で八宝菜を買う。ワカメと春菊の味噌汁。

二十四日（水）

こでまりの白い花買う。「鎌倉の小道をとぼとぼ歩きたい」。主治医に会い、肝臓が四、五倍の大きさになっていると聞く。鎌倉へ帰って、佐助の売家を見てきてほしいと言う。帰ろうとすると「なるべく早うきてや」と、たよりない顔をしている。

こんな自然への回帰をいう条々をくどく引用するのも、本来肉体感うすく、観念の化物のような高橋和巳なればこそと言おう。「主人は要するに自閉症の狂人であった」、と高橋たか子が書いて世間の耳目を驚かしたのはその死の直後であったが、彼はいわば地上から分離された一個の巨大な観念の凝縮体だった。その凝縮素は悲哀である。私は「悲哀」という言葉が、この作家ほど魂も氷るほどの沈痛な語気をもって、また他界へ抜けるほどの戦慄的なひびきをもって、発せられた例を知らない。その彼が、いま観念の凝縮に自分の肝臓が耐えがたくなったと感じている。そして肝臓のために観念の解体を画している。これを回心と呼べば、彼の末期におとずれた回心は観念を肝臓にかえ、精神を身体に属さしめるところにあった。

もっとも、これを回心と呼べるかどうか、私は疑う。これは単なる気の弱りであり、もし仮にこのとき高橋和巳に健康がすみやかに回復したとすれば、彼はけっして日当りのよい庭で日向ぼっこを楽しんだり、土いじりに専念遊ぶことをしなかっただろう。彼の文学は「しずかな余生への夢、旅、釣り、山、風景」、あるいは、「土いじりするんやで。鉢買うてきて、花つくるんや」、こういう地上的な和煦温暖の眺めからもっとも遠いところで、

みずからにさえ悲哀の量の測りがたい、不吉な、星雲のような精神の渦動を見せて、のたうっていた。そしてまたもし、果して彼がこの末期の願いを仮想の生において実現したとすれば、彼の文学の分極はほとんど了解を越えたものとなるだろう。一命を拾ったのちの高橋和巳を尾崎一雄の属統に重ねることは、思考の混乱なしには叶わないのである。

しかし、それにもかかわらず、彼が死の間際において到達したこの日常への回帰の願いは私に感動を与える。それは本来おそろしく観念的な作家の、身体的なものの回復として感動を与えるのである。身体的な立場は、もともと私が自分の生に目覚めたときから何時しらずそこに実生の芽のように生えていると気付いた立場であり、一旦は死を覚悟した病いを手術の成功によって癒されてからは、ますます堅固にそこに聳立していることを自覚しつつ今日にいたっている立場である。同じ病いによってふたたび起つことのなかった高橋和巳の最後におとずれたものが、よしそれが単なる気力の衰えによる仮性的なものに過ぎなかったかもしれないとしても、このような身体的立場であったことは私にとってかりそめのことではない。そしていまこれを文学上の立場に移せば、それはそのままリアリズムの立場に通じるであろうことは言うまでもあるまい。

＊＊

高橋和巳という、情動と知識の量において一個のダムのように大きな存在が、死とともに、まるまる、そして一瞬のうちに、はじめからなんにもなかったと同じ無の状態に帰してしまうと考えるのは、そう考える方が奇妙なのではないか。先の七回忌追悼の文章のなかで、高橋たか子がそういう疑問を払いかねていることはすでに言った。

「文芸」昭和五十二年七月号に出た短いエッセイ「人の死後」はそれを受けて書かれたもので、彼女の死生観といったものが率直に示されている。それは一種の心身二元論である。霊魂不滅の説と言ってもよい。彼女は、肉体の消滅ののちに残る精神は、個であることを止めて幽暗な集合的潜在意識の領域に還って行くと考える。そのとき、たとえば高橋和巳という生前における豊かな個性は、その体験や知識の総量を減じることなく潜在意識の中に溶解し、そこに溜められるとされているのが特徴的だ。そして人は、またその幽暗な領域から生れ出る。

「さて、人は、生れる時、その共有の仄暗い無限世界から生れてくる。そうして、何十年

か生きて、生きた間に考えたこと感じたことの記憶の一切が、死とともに、その元の世界へ帰っていく。元あったものがそのまま帰っていくのでなくて、生きていた間に豊饒にされて帰っていく。そこで他のすべての人のそれと混じりあって温存されることになる。おびただしい人々が何世紀も何世紀も生きて死に、そうして、共有の仄暗い無限世界は、人人の生きて考えたこと感じたこと見たことの記憶の一切によって肥料のように肥やされていく。」（「人の死後」）

死後のことは誰にもわからない。すべては仮説ということになるが、高橋たか子のこの考え方は、個体の意識がそのまま死後にまで持続するとする古典的な霊魂不滅の説よりはるかに受け入れやすい。輪廻転生のことにしても、こういう生から死へ、死から生への還流のかたちは、私の現世的感覚にとっても奇怪で堪えがたいということはない。それに神秘家である高橋たか子のこの潜在意識の領域に関する考え方には何か体認による裏付けといったものが伴っているらしいことも、彼女の言説を確信ありげなものとするのに役立っている。

にもかかわらず、私は高橋和巳の精神は彼の身体の消滅とともに亡んだと考える。精神

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.